

本歌取と本歌

——『古今和歌集』第六八首をめぐって——

小 高 道 子

令和元年十二月十五日、実践女子大学における「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」シンポジウム「源氏物語、伝統と未来」に参加し、「三条西家の古典学―古今伝受と源氏伝受―」と題して、宗祇の古今伝受を継承した三条西家は、歌人・歌学者として和歌を詠むために『源氏物語』を学んだことを述べた。花宴巻「外の散りなむとやをしへられたりけん」という表現は、『古今和歌集』第六八首（以下「六八首」と略す）の「見る人もなき山ざとの桜花ほかのちりなむのちぞさかまし」⁽¹⁾をもとにしたものであるが、古今集の和歌には「をしへ」という言葉はない。教えるという言葉は用いていないが、「花にいひをしへたる心」であるので、「哥の詞になき事をも心をとりにかくのことくかける」という。そしてこのように、本歌とする和歌の言葉にはない言葉を、和歌の意味を用いて詠む本歌本説の用い方について、『花鳥余情』が詳しく記し、『岷江入楚』もそれを継承していることを述べた。

ところが、現代の注釈では、こうした本歌の取り方についてはあまり考慮されない。例えば『新日本古典文学全集』の『源氏物語』花宴巻の該当部分を見ても、本歌の指摘のみで、「花にいひをしへたる心」とする『花鳥余情』の指摘は見られない。⁽²⁾

現代の国文学では、本歌取とは、歌の言葉を取ることのみをいうのであろうか。本稿では『花鳥余情』『岷江入楚』が記した「哥の詞になき事をも心をとりにかくのことくかける」という本歌の取り方について検討を加えたい。

一 『花鳥余情』のいう本歌取と現代の本歌取

平成二十六年に刊行された『和歌文学大事典』（古典ライブラリー、以下『大辞典』と略す）の「本歌取」の項（渡部泰明氏執筆）には次のごとくある。

「歌学用語」周知の和歌の表現を意識的に取り入れて、新しい和歌を詠む技法。取り入れる和歌を、本歌という。和歌を踏まえた物を指すのが原則だが、物語や漢詩文などを取り入れたものも含むことがある。平安時代中期ごろに至ると、歌の表現に新しさや個性が求められるようになり、公的な場においては、こうした表現法は避けるべきものといった忝色も生じたらしい。(中略)その後藤原俊成および定家ら新古今時代の歌人たちによって、模倣を乗り越える方法が開拓され、詠法として確立した。とくに和歌の技法として問題とするときには、この一二世紀後半から一三世紀はじめにかけての詠法を指すことが多い。定家の歌論書『詠歌大概』には、①時代の近い歌人の歌は取ってはならない、②取り入れる古歌の言葉は、二句及び三、四字以下にすること、③主題を変えること、などの指示がある。古歌の言葉を明示的に取り込みつつ模倣の域を突破し、本歌との響き合いの中で新しい歌の世界を構築することを目的とした、実践的な指導と見なされる。

これを、「本歌本説の用」の方を記した『岷江入楚』に引用された『花鳥余情』の次の記事と比較する。

花 古今哥に外の散りなん後そさかましとよめるは花にいひをしへたる心なれは哥の詞になき事をも心をとりにてかくのことくかける也 定家卿の哥はおほくは此物語より出たりとみえ侍り いこま山いさむる花にみる雲のうきて思ひのたゆる日もなし とよめ

るは本哥の雲なくしそといへるは雲をいさめたる心なれはやかて心をとりにていさむる花とよみ侍る也 この詞に相似たるやうなれはよりもつかぬ事なれと筆の次に申侍る也 大かた源氏などを一見するは哥などによまむ為也 よまむにとりては本哥本説を用へきやうをしらすしてはいか、と思ひ給へ侍れはいときなき人の為にしるしつけ侍る也

『大辞典』でいう本歌取は「取り入れる古歌の言葉」を問題にして、その取り込み方について「古歌の言葉を明示的に取り込みつつ模倣の域を突破し、本歌との響き合いの中で新しい歌の世界を構築することを目的とした、実践的な指導」とされている。それに対して『花鳥余情』では、「哥の詞になき事をも心をとりにてかくのことくかける」と、和歌の言葉のみならず、和歌の心を取ることを示している。定家の和歌についても、『大辞典』が「藤原俊成および定家ら新古今時代の歌人たちによって、模倣を乗り越える方法が開拓され、詠法として確立した」とするのに対して、『花鳥余情』は、「いこま山いさむる花にみる雲のうきて思ひのたゆる日もなし」とよめるは本哥の雲なくしそといへるは雲をいさめたる心なれはやかて心をとりにていさむる花とよみ侍る也」と、定家の和歌が和歌の心を取って詠まれたことを指摘して、「定家卿の哥はおほくは此物語より出たりとみえ侍り」と記す。『花鳥余情』がいう、言葉を取るだけでなく心を取るという本歌取の方法についても再検討する必要がある。

二 『花鳥余情』と『古今和歌集』注

これまで引用したように現代の「本歌取」は、「歌学用語」であり、「周知の和歌の表現を意識的に取り入れて、新しい和歌を詠む技法」すなわち「和歌」の詠み方であった。だが、『花鳥余情』が「本哥本説を用へきやう」「大かた源氏などを一見するは哥などによまむ為也」について述べているのは『岷江入楚』花宴卷149の注であり、「外の散りなむとやをしへられたりけん」という『源氏物語』本文についての注である。ここでは、本歌の心を用いて「新しい和歌」を詠むのではなく、本歌の心を用いて『源氏物語』の本文が記されているのである。

さらに『花鳥余情』の「花にいひをしへたる心」という本歌の心についての解釈は、古今伝受における六八首の講釈で用いられている。『大辞典』がいう「本歌との響き合いの中で新しい歌の世界を構築する」だけではなく、本歌の心を用いて記された「新しい」文章の解釈が、文章のもとになる本歌の解釈に用いられている。本歌が新しい作品に取り込まれるだけでなく、本歌をもとにして後に創作された作品が、そのもとになった本歌の解釈に取り込まれたのである。東常縁の講釈を宗祇が聞書したとされる『古今和歌集両度聞書』（以下『両度聞書』と略す）は六八首の注に次のように記す。

桜に対していひをしふるやうの心也。すこし述懐の心あるべし。
五句の外に心ある躰これら尤本たるべし。

六八首の和歌の「外の散りなん後そさかまし」について、「桜に対していひをしふるやうの心」とした上で、「五句の外に心ある躰」であるとしている。和歌の五句に記された言葉には「をしふる」という語はないが、「五句の外に」ある心を用いた表現であるという。この「桜に対していひをしふるやうの心」というのは、この和歌を本歌として「外の散りなむとやをしへられたりけん」と記した『源氏物語』の本文及び『花鳥余情』の注を意識したものである。

また、このように、人に見てもらうために「外の散りなん後そさかまし」と「桜に対していひをしふる」ためには、せっかく咲いても「見る人」がいないことを花が不本意に思うことが前提になる。『両度聞書』は、『古今和歌集』五〇首目の「山たかみ人もすさめぬさくら花いたくな侘そ我見はやさん」（以下「五〇首」と略す）の和歌「山たかみ人もすさめぬさくら花」の注に「無別義。「いたくなわびそ」といへる、如此の心、歌道の命也」と記し、「我」が「見はや」すから「いたくなわびそ」という「いたくなわびそ」が重要であると指摘している。

この六八首を本歌とする『源氏物語』の本文を意識した宗祇の注釈は、宗祇の他の門弟に対する注釈書にも見られる。一方、古今集注釈書解題、古今和歌集古注釈集成を一瞥するに、宗祇以外の注釈書には見られない。宗祇独自の解釈と言えよう。

本歌の取り方を記した『花鳥余情』の記述は『岷江入楚』にも引用され、『源氏物語』の解釈においては三条西家でも継承されたことがわかる。しかしながら、『古今和歌集』の解釈に「をしふる」と記すこ

とは、三条西実枝から細川幽斎への古今伝受における『古今和歌集』の講釈では用いられなかった。実枝は幽斎にこの講釈を伝えなかったのである。幽斎が実枝の講釈聞書を清書して実枝が加証奥書を記した『伝心抄』⁴は、それぞれの和歌に次のように注釈を記している。『古今和歌集』の講釈においては、『古今和歌集』を本歌として用いた後世の作品の本文を取り入れる必要を認めなかったのであろう。

○ 六八首

五句三十一字ニ心カアマリタル哥也ソコニ述懐ノ心カアル也余所ノ花カ散タラハ此山里ノ花ヲモ問ふヘキノ心也

○ 五〇首

山タカミ人モスサメヌ桜花トハ所モソホヘテ花モヨクナキ体也其能ナキ花カ我ニ似合タリサテ我ミハヤサント読リ只ノ花ニテハ我ミハヤサント云所サヤウニイハレマシキ事なり馬車ノツトウ所ノ花ハ及ナキト云心アリ

このような講釈を受けた幽斎は、智仁親王に講釈をするときに、『古今和歌集』の講釈としては和歌そのものの解釈のみを伝えるが、あわせて『源氏物語』がこの和歌を本歌として文章を記していることを指摘している。

智仁聞書

そこに八述懐の心也よその花ちりなん後そかさまし山里の花をも

みる人あらんほとに外よりもそくさけと也（中略）源氏にも此心をとりに外のちりなん後とそをしへられけるとある也

心ハいかにもそひへたる所の花ハよくもなししかれハよき所の花ハをよひもなしと也

こうした注を比較すると、古今伝受における講釈では、道統を継承していても、必ずしも師説を継承していないことがわかる。自分が受けた講釈を伝えるのではなく、それぞれの師弟関係において講釈する内容が相違しているのである。また、実枝の講釈内容が、『岷江入楚』と『伝心抄』とで相違していることも注目されよう。講釈内容は、講釈する作品や講釈を受ける門弟によって異なっていたのである。

三 『鞍馬天狗』の桜

冒頭に記したシンボジウムの終了後に同じく講師を務めた宝生流二十代宗家宝生和英氏が「同じ事が『鞍馬天狗』にあります」と指摘された。そこで『新潮日本古典集成』『新日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』の注を見ると、本歌になる『古今和歌集』の和歌は指摘されているが、歌の言葉の指摘のみであり、歌の心の指摘は見られない。『鞍馬天狗』の「見る人もなき山里の桜花、よその散りなん後にこそ」について『新編日本古典文学全集』（小山弘志・佐藤健一郎氏校注）は口語訳に、「見る人とても（なく）およそ人に顧みられること

も)ない」と語を補っているが、本歌にされた『古今和歌集』の和歌「見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし」(春上六八)の心を取った口語訳と言えよう。同じく『古今和歌集』(春上五〇)に「山高み人もすさめぬ桜花いたくなわびそ我見はやさむ」あるように、人に見られることの少ない山桜は「いたくなわびそ我見はやさむ」と詠まれている。『花鳥余情』のいう歌の心を考えるなら、「ほかの散りなむ後」に咲けば「見る人」もいるであろうが、ほかの桜が散る前に咲いてしまうと「見る人」もなく「いたはし」なのであろう。

能楽において歌の言葉に限らず心を取る事が行われていたとすると、同じ『鞍馬天狗』の「今日見ずは悔しからまし花盛り」、「咲きも残らず散りも始めず。げに面白き歌の心」に、「今日来ずは明日は雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」『古今和歌集』春上第六三首を連想する事が出来よう。『古今和歌集』の和歌は贈答歌であるため「今日来ずは」とあるが、今日が花盛りの桜を前にして、「明日は雪とぞ降りなまし」明日は雪として散ってしまうでしょう、と今日が花盛りであることを詠んでいる。雪として散ってしまうは、雪とは違って消えることはなくても、花とみることは出来ないだろうというのである。『鞍馬天狗』の桜は「咲きも残らず散りも始めう」咲き残ることも散り始めることもしないものの、花盛りの「今日」見られないとしたら「悔しからまし」というのであろう。これも『花鳥余情』のいう歌の心を取った表現といえよう。

本歌取という技法は、いつから歌の心ではなく言葉のみを問題にするようになったのであろうか。『花鳥余情』のいう歌の心を取った表現

は、さまざまな作品に用いられている。少なくとも歌道を修め能楽を嗜んだ細川幽斎は、『鞍馬天狗』の桜にこのように『古今和歌集』の和歌を連想していたであろう。こうした歌の心を取る本歌取については、稿を改めて検討したい。

注

- (1) 和歌の引用は新編国歌大観による
- (2) 『新日本古典文学全集』は「ほかの散りなむ」の注に、六八首の和歌を指摘した後「宮中の花の宴の盛儀の後で、私宴に世の貴紳を集めて豪遊を企てる右大臣家の権勢意識が込められる」と記す。なお、『花鳥余情』がいう、物語や和歌の「心」を取ることは「源氏物語」と和歌」(『中京大学国際教養学部論叢』二〇一三・九)で検討を加えた
- (3) 引用は『中世古今集注釈書解題』による。
- (4) 引用は『古今集古注釈書集成 伝心抄』による。

付記

本稿の第三項は実践女子大学におけるシンポジウムにおける宝生和英氏の御教示に負うところが大きい。記して氏ならびにシンポジウム関係各位に深謝申し上げる。

